

Title	真淵の歌学に関する覚え書
Author(s)	宇佐美, 喜三八
Citation	語文. 1958, 21, p. 35-41
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68528
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

真 淵 の歌学に関する覚え書

宇 佐 美 喜 三八

稲彦本『古今集左注論』について

稿の一つの駄目押しにもしておかうと思ふのである。 に入れることが出来たので、ここにその書物について述べ、傍ら前 表してから後、その事実を裏書きするやうな『左注論』の写本を手 はや疑ふ余地のない事実であると考へる。ところが上記の小論を発 詳しく論証したやうに、『左注論』が真淵の著書であることは、も を加へ、拙著『和歌史に関する研究』に収録した。) そこでかなり **誌第一輯において論考を試みる所があった。(その小論は少し補訂** れが真淵の著作であるべきことを決定的に明らかにするために、本 らうといふ意見が現はれて来た。わたくしはその驥尾に附して、そ **ゐたが、昭和に入ってから、在満の著作ではなく、真淵の著作であ** 『古今集左注論』は久しい間荷田在満の著作の一つに数へられて

のみをもって直ちに著者を決定し難いことは、これも前稿に述べた は著者を荷田在満と記した本も伝はってゐるので、記された著者名 り、すでに野村八良博士によって紹介せられてゐる。しかし一方で て来て、賀茂真淵の著と記した伝本のあることは、前稿に述べた通 『古今集左注論』は荷田全集に翻刻せられるまで写本で伝へられ

> する意図のあった痕跡が認められるのである。稲彦本の扉には野の 林の主人といふ経歴を持ってゐた稲彦は、この賀茂翁の遺稿を板行 著書として校訂を加へ、巻末に識語を附してゐる。のみならず、書 稲彦の自筆手沢本と見なされるもので、稲彦は『左注論』を真淵の 通りである。今ここに紹介しようとする『左注論』の写本は、橋本

枠で囲んだ中に、 賀茂大人著

古今倭謌集左注論

源稲彦校刻

ゐて、内題には、 はそのまま板下に使用してもよいほどの端正な文字で清書せられて ことは、右の扉における記載によって推測せられるであらう。本文 が賀茂大人の『左注論』を校訂して、これを板に彫らうと計画した たものらしく、扉の裏折は新しい紙を張り足してできてゐる。稲彦 と書かれてをり、この扉はもともと表紙裏に張った見返しを改装し

とある。荷田全集本や野村博士蔵本のやうに、 寛保二年九月、 の、作者の論、幷古今集左注論 金吾君に奉る。 ほの~~と明石の浦といふ歌 「古今集左注論」と

を張り重ねて訂正した文句である。うな稲彦の識語がついてゐる。番号を附して括弧で囲んだ部分は紙いふ内題は記されてゐない。さうして巻末には本文に続いて次のや

元本、誤いと多きを、さまん~に考へて、かくはものしつれて本、誤いと多きを、さまん~に考へて、かくはものしていた。 かいで (にいふ、此書の言葉ども)に、てにをはのとゝのと、ついで (にいふ、此書の言葉ども)に、てにをはのとゝのと、ついで (にいふ、此書の言葉ども)に、てにをはのとゝのと、ついで (にいふ、此書の言葉ども)に、てにをはのとゝのと、ついで (にいふ、此書の言葉ども)に、てにをはのとゝのと、ついで (にいふ、此書の言葉ども)に、てにをはのとゝのひなど、いかにぞやおぼゆることも多かれど、さる事は、この分の書には、 (すべて、なきにもあらねば、まさしく写誤にあめの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まさしく写誤にあるの書には、 (すべて、なきにもあられば、まるしていまない。)

この文は本文と同様の筆跡で書かれてゐる。紙を張って訂正を施らといふやうな推蔵の跡から考へて、識語は当然稲彦の自筆であらことが推定せられ、従って識語と同筆跡の本文も稲彦の自筆であらことが推定せられ、従って識語と同筆跡の本文も稲彦の自筆であるこの文は本文と同様の筆跡で書かれてゐる。紙を張って訂正を施この文は本文と同様の筆跡で書かれてゐる。紙を張って訂正を施

1(ねど、さておきぬ、………さとりがたき)=ず、さる善本辛うじて判読することができる。それを示すと次の通りである。稲彦が張紙をして訂正を加へた箇所の初案の文は、紙を透かして

を得て、またく〜も校合してむ、かくいふは文化三年の霜月

のなかば、

2(にいはれ侍りし、さ)=にうめかれ侍りし、

3(此書の)=右の中

6(にいふ、此書の言葉ども)=ついでにいふ、此書の言葉づ5(今よむ所は………所なれ)=されど今は私によみをつけ、4(元本に、訓点)=元本に点を

にもあらねば、正しく 写 誤 にあらじとおぼゆるは、あら7(すべて、なきにもあらねば……稲彦いふ)=すべてなき

たむることなし、

かひども

では、 であったといふ事実を知ることができる。 稲彦が『左注論』の清書を終り、識語を書いたのは文化三年の ちそれによれば、執筆の年代が「文化三年の霜月のなかば」とあっ ちそれによれば、執筆の年代が「文化三年の霜月のなかば」とあっ ちそれによれば、執筆の年代が「文化三年の霜月のなかば」とあっ たれによれば、執筆の年代が「文化三年の霜月のなかば」とあっ たれによれば、執筆の年代が「文化三年の霜月のなかば」とあっ として、訂正について注意すべきは1の箇所の初案の文である。即 として、訂正について注意すべきは1の箇所の初案の文である。即 として、訂正について注意すべきは1の箇所の初案の文である。即 として、訂正について注意すべきは1の箇所の初案の文である。即 として、訂正について注意すべきは1の箇所の初案の文である。 本の後の部分は から約三年後の文化六年の六月に二十九歳で没した。

に、貫之のうた」として、「おぼつかないまとしなればおほあらきしたものも見られる。例へば『左注論』の其の三十四には「拾遺集稲彦の意見を書き入れた所があり、その中には、真淵の間違ひを正れと区別すべきであると考へる。他にそれらとは別に、頭書として本文の書写の誤りはやはり紙を張って訂正してゐるから、朱書はそ本文の書写の誤りはやはり紙を張って訂正してゐるから、朱書はそ

は、のもりの下草入もありけり」といふ歌が引かれてゐるが、その所に

1

きぎず、 うたなり。おぼつかなの哥は、貫之集にみえたり、撰集の出所ばえたがへられしにや、是は拾遺集、夏部に有り、ただみねのほえたがへられしにや、是は拾遺集、夏部に有り、ただみねのはえたが、よのなで、かりを でき、おほぎなど、此哥、拾遺にみえず、おほあらきの、もりの下草、

と頭書が加へられてゐる。

『左注論』の中には何首かの万葉集の歌が原文のままに引かれて

万葉の巻十一にあるり、稲彦がそれに訓読を附してゐることは、前引の識語に述べて私案を立てたものと解せられる。例へばり、稲彦はある特定の学者や書物の訓点をそのまま用ひたのではなめる通りである。「今よむ所は、予つけたる所なれば」といってをゐて、稲彦がそれに訓読を附してゐることは、前引の識語に述べてゐて、稲彦がそれに訓読を附してゐることは、前引の識語に述べて

桜麻乃 苧原之下草 露有者 令明而射去 母者雖知 (二六八

葉の歌を引き、第一句には「さくらをの」、第三句には「つゆしあまった本居宜長は『古事記伝』巻三十九の尤恭記の歌の注に右の万ちった本居宜長は『古事記伝』巻三十九の尤恭記の歌の注に右の万本および袖中抄第十一や和歌童蒙抄第七の所引の歌などでは、第四本および袖中抄第十一や和歌童蒙抄第七の所引の歌などでは、第四本および袖中抄第十一や和歌童蒙抄第七の所引の歌などでは、第四本および袖中抄第十一や和歌童蒙抄第七の所引の歌などでは、第四本および袖中抄第十一や和歌童蒙抄第七の所引の歌などでは、第四本および袖中抄第十一を記した。

ある。賀茂真淵の著とある野村八良博士蔵本は、天明四年羽根真清ある。賀茂真淵の著とある野村八良博士蔵本は、天明四年羽根真清あり、速水行道といふ名が記されてゐる。稲彦本よりは後の書写でた。稲彦は『古今集左注論』が真淵の著作であることを自明のことに「文化十三年葉月十五日写」、「癸亥春得是書 尋 以一本校焉」として、学者的な見地から、いささかこれに整備を加へたのである。在満の著作としても伝はってゐるといふ事実には、まったく気づいてゐないやうに思はれる。上野図書館蔵の『左注論』の写本は、荷田全集に翻印せられてゐるが、著者が荷田在満となってゐて、奥書田全集に翻印せられてゐるが、著者が荷田在満となってゐて、奥書田全集に翻印せられてゐるが、著者が荷田在満となってゐて、東書の書作と記述。

の写したものを、寛政十二年宇宙亭保光の写した本で、これは稲彦

全集に『左注論』が収録せられることもなかったであらうと考へ書において、『左注論』を在満の著作とすることはなく、また荷田稲彦本が刊行せられてゐたならば、『近代名家著述目録』以下の諸稲彦はこれは真淵の著作として毫も疑ってゐないのである。もしも稲彦本が刊行せられるのなならば、『近代名家著述目録』以下の諸稲彦はこれは真淵の著作として毫も疑ってゐないのである。もしも稲彦はいいの頃から生じて来てゐるかは明らかではないが、本より少し前の書写といふことになる。『古今集左注論』を在満の本より少し前の書写といふことになる。『古今集左注論』を在満の

1 真淵の歌論と堀川学

るに至って、儒者の思想を極力斥け、徂徠や春台を罵って憚らなか **夙に野村公台が『読加茂真淵国意考』の中で 言 及 し たところであ** ても、古文辞学との関係はもちろん無視してはならない問題となる て推察することができる。従って真淵の学問が徂徠学派の古文辞学 して好意を抱いてゐたらしいことは、真淵の著書の中の記述によっ は服部南郭と親しい交りを続け、儒学を排斥しても南郭の学問に対 に師事して、古文辞学の洗礼を受けたのであった。江戸に出てから 定できない事実と考へられてゐる。真淵は晩年に古道思想の円熟す 日においては真淵の学問に古文辞学の影響のあることは、もはや否 る。近代の学者は両者の関係についてしばしば比較討究を試み、 ばやや奇異に感ずる人もあるかも知れないが、真淵の歌論を読むと は、真淵の歌論と仁斎の古義学との交渉の問題であって、さういへ であらう。然しそれはそれとして、今ここに取り上げようとするの から影響を受けてゐるのは当然であり、彼の歌学を考察するに際し ったが、若い時代には、徂徠の孫弟子にあたる春台の門人渡辺蒙庵 真淵の古学が徂徠の古学に倣ったものではないかといふことは、

じた一節がある。 も遺』である。その「歌をもてあそぶ論」の中には、次のやうに論は、寛保二年十一月、田安宗武に求められて草した『国歌八論余言は、寛保二年十一月、田安宗武に求められて草した『国歌八論余言

ででは、いとめでたりです。
でで世の中の事をも人の心をもしろしめすべくは、いとめでたいぶ人やいひ侍りつらむ。げにもその心のおもふ所を一すぢにいぶ人やいひ侍りつらむ。げにもその心のおもふ所を一すぢに人の情をよくしろしめすことなし。詩は人情をのぶると荘周とりさまも国々のさまも、つねにしも見聞給ふことなく、ましてりさまも国々のさまも、つねにしも見聞給ふことなく、ましてりたがなり。

不」有。君子誦」詩。不」出,戸庭『可』以知,天下人情。子何者。人情之形,于言,者也。三百篇其尽」之矣。 天下人情。 于何又況人主在,九重之内。 而欲」知,閻巷人情。 難之難矣。 今夫詩

面的に尊んでゐる。

問題となるのは、前引の『余言拾遺』の中に、学系統の漢学の教養に因ることは一応認められるとしても、ここでかうして、詩は人情を述べたものといふ真淵の思想が、彼の徂徠かうして、詩は人情を述べたものといふ真淵の思想が、彼の徂徠

げてゐるが、荘子の言については、 立」言引」詩。伝記所」載可」見矣」と述べ、詩に関する諸家の説をあきであらう)。春台は右の『朱氏詩伝膏肓』の巻頭女の中で、 「古人きであらう)。春台は右の『朱氏詩伝膏肓』の巻頭女の中で、 「古人ってゐるが、前後から見て、やはり他本のやうに「人情」とあるべきであらう)。春台は右の『朱氏詩伝膏肓』の巻頭女の中で、 「古人情」とないる人やいひ侍りつらむ。

と記してゐる。(『六経略説』においても同様である)。『荘子』には

班子曰。詩以道」志。

天運篇に六経の名をあげ、天下篇に、

詩以道」志。書以道」事。礼以道」行。楽以道」和。易以道〃陰陽』

春秋以道;(名分)。

に詩に関して述べた所は見出されないやうである。 (もとよりと述べて、六経の性質を説明した中に詩の説が見える。(もとよりと述べて、六経の性質を説明した中に詩の説が見出されない。『荘子』の版本(注釈書を含む)数は以て志を道ふ」とある他の詳細は知り難いと記されてゐる。真淵は以て志を道ふ」とある他の詳細は知り難いと記されてゐる。真淵は以て志を道ふ」とある他の詳細は知り難いと記されてゐる。真淵は以て志を道ふ」とある他の詳細は知りである。 鈴木博士の『支は求められず、真淵は天下篇の「志」の語を「入情」といふ語で表はしたのであるかも知れない。『荘子』の版本(注釈書を含む)数はしたのであるかも知れない。『荘子』の版本(注釈書を含む)数はしたのである。

東淵の漢学の師渡辺蒙庵は老荘の研究家でもあった。後年の真淵 の老荘思想に対する同情的態度が蒙庵の影響であるか否かは別問題 の老荘思想に対する同情的態度が蒙庵の影響であるか否かは別問題 の老荘思想に対する同情的態度が蒙庵の影響であるか否かは別問題 の老荘思想に対する同情的態度が蒙庵の影響であるか否かは別問題 である。

説いた後、である。同書上巻の詩を論じた条の中には、詩に懲創の説はないとである。同書上巻の詩を論じた条の中には、詩に懲創の説はないとさてそこで注意せられるのは伊藤東涯の『古今学変』の中の記述

之大旨。 然則詩以道"人情!。 其言難"出"莊子!。 而此一語亦足"括"[三百篇

く東涯の著述である『読詩要領』の中の次の記事によって推定するく東涯の著述である『読詩要領』の中の次の記事によって推定するとになるが、前記の通り、『荘子』には天下篇に「詩以道志」とあるのが一般に認められてゐて、「詩以道人情」をやはり『荘子』の天むるのが一般に認められてゐて、「詩以道人情」といふ言葉は見出ことになるが、前記の通り、『荘子』には天下篇に「詩以道志」とこれに従へば「詩以道』人情」」といふ言葉が『荘子』に見えてゐると述べられてゐる。この場合の荘子は人名ではなく書名であらう。

道"人情」といふの一句にてつつまることなり。に、先儒以来常に引用せらる。詩のことばはさまざまなれども端の事なれども、このことばよく詩の道を こ と わ りたるゆへ荘子に五経の事を説て、詩以道"人情' とあり。……荘子は異

ことができるのである。

すでに記したやうに、『荘子』には天下篇の六経の性質を述べた所は「詩以道志」と見えてゐる。東涯が五経と記してゐるのは、詩・本・楽・易・春秋の六のうち、秦火に滅んだといふ「楽」を省道人情」は、天下篇の言葉を指したものと思はれ、東涯の「詩以道人情」は、天下篇の言葉を指したものと解して差支へがないと考える。『荘子』には天下篇に「詩以道人情」とある本が伝はってゐるのであらうか。(中国哲学専門の学者にも尋ねてみたが、恐らくるのであらうか。(中国哲学専門の学者にも尋ねてみたが、恐らくるのであらうか。(中国哲学専門の学者にも尋ねてみたが、恐らくるのであらうか。(中国哲学専門の学者にも尋ねてみたが、恐らくるのである)。

やいひ侍りつらむ」は、東涯の著の記述に拠ったのではないかといあまりあり得たはずで、真淵の「詩は人情をのぶると荘周といふ人本で伝はった。時代的に見れば、真淵がこれらの書に接する機会は延三年に刊行せられ、『読詩要領』は板本として刊行せられず、写通「古今学変』は享保七年の著で、門人の間に写し伝へられて、 寛

第十三輯で論述した所である。 交ったが、在満が堀川学を修めたと見なされることは、かって本誌の隆盛時代であった。また江戸に出てからは荷田在満と特に親しくふ推測も一応は成立つであらう。真淵が京都に遊学したのは堀川学

もとより真淵が東涯の著書によって荘子の言を引いたと見るのはもとより真淵が東涯の著書によって荘子のであるが、先儒があるか否かは現在の所決定することできない問題である。従って真淵は東涯の著書ではなく、先儒の書によって荘子である。従って真淵は東涯の著書ではなく、先儒の書によって荘子の言を引いたものとも考へ得る余地は存するのであるが、先儒がの言を引いたものとも考へ得る余地は存するのであるが、先儒がの言を引いたものとも考へ得る余地は存するのであるが、先儒がの言を引いたものとも考へ得る余地は存するのであるが、先儒がの言を引いたものとも考へ得る余地は存するのであるが、先儒がの言を引いたも見るのはあくまで一つの推測であって、真淵の言葉と東涯の言葉とに、はたしあくまで一つの推測である。

触れたことがあるが、今それについてやや詳しく述べておくことにて「国文学」第十九号(関西大学国文学会)に書いた論考の中でも斎の説に従ったと見なすべきものがある。その問題に関してはかつい所である。真淵の晩年の和歌に関する論述の中には、明らかに仁『余言拾遺』の中の言葉が東涯の著述に拠ったか否かは確認し難

る『古今集序別考』を見ると、仮名序の本文の「そのはじめをおも「明和二年の春加茂真淵六十九の齢にて考侍る」といふ奥書のあ

ある。へば、云々」のあたりにつけられた頭注の中に、次のやうな記述がへば、云々」のあたりにつけられた頭注の中に、次のやうな記述が

古への歌はをさなき心をよむを専らとせり。人まろの歌を挙てはよくまれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたる時ふとおもふこと其ままよむぞ古へ人の習にて、則をさな児のひとへ心の如くいふに、却てあはれはある也。(中略)からのひとへ心の如くいふに、却てあはれはある也。(中略)からのひとへ心の如くいふに、却であせよといふ如く、思ひにせまる時ふとれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたるはよくまれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたるはよくまれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたるはよくまれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたるはよくまれあしくまれ、思ふ事を直にいひつるをたふとみたる。

徂徠の解釈に従ってゐないことは、徂徠の『論語徴』における注釈と注してゐる。「直也」といふのが仁斎独自の解釈であり、真淵が思無[邪。直也。

祇其思無」邪。是孔子之心也。詩之義多端。不」可」為:典要;古之取:義於詩;者。亦唯心所」欲。を見て知ることができる。徂徠は、

と述べ、「思」や「邪」の意義などを説いてゐるが、さらに

義"矣。 程子曰。思無"邪者誠也。仁斎先生曰。 直也。可"謂"不"知"字

では己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真には己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真流が少からず心を寄せたことも想像せられ、真淵と堀川学との接触として日本的な儒学を打ち立てた仁斎の学問に対して、若い日の真として日本的な儒学を打ち立てた仁斎の学問に対して、若い日の真として日本的な儒学を打ち立てた仁斎の学問に対して、若い日の真として日本的な儒学を打ち立てた仁斎の学問に対して、若い日の真には己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真には己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真には己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真には己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真には己が覚え居て間に一人もよく弁ぜる人なし」と言ってゐる。真には己が覚え居に、一人ない。

大阪大学教授 文学博士-